

城を歩く会 11月定例会 資料①

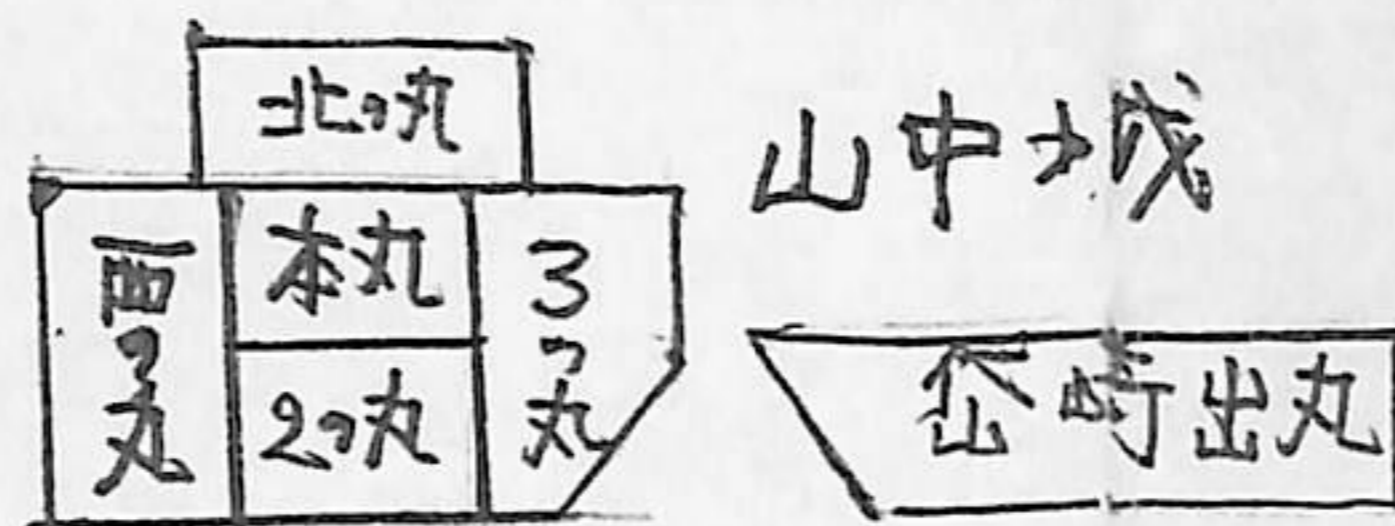
日帰りバス見学会「伊豆・後北条氏の城と江川家の遺構」

平成24-11-14

山岸弘明

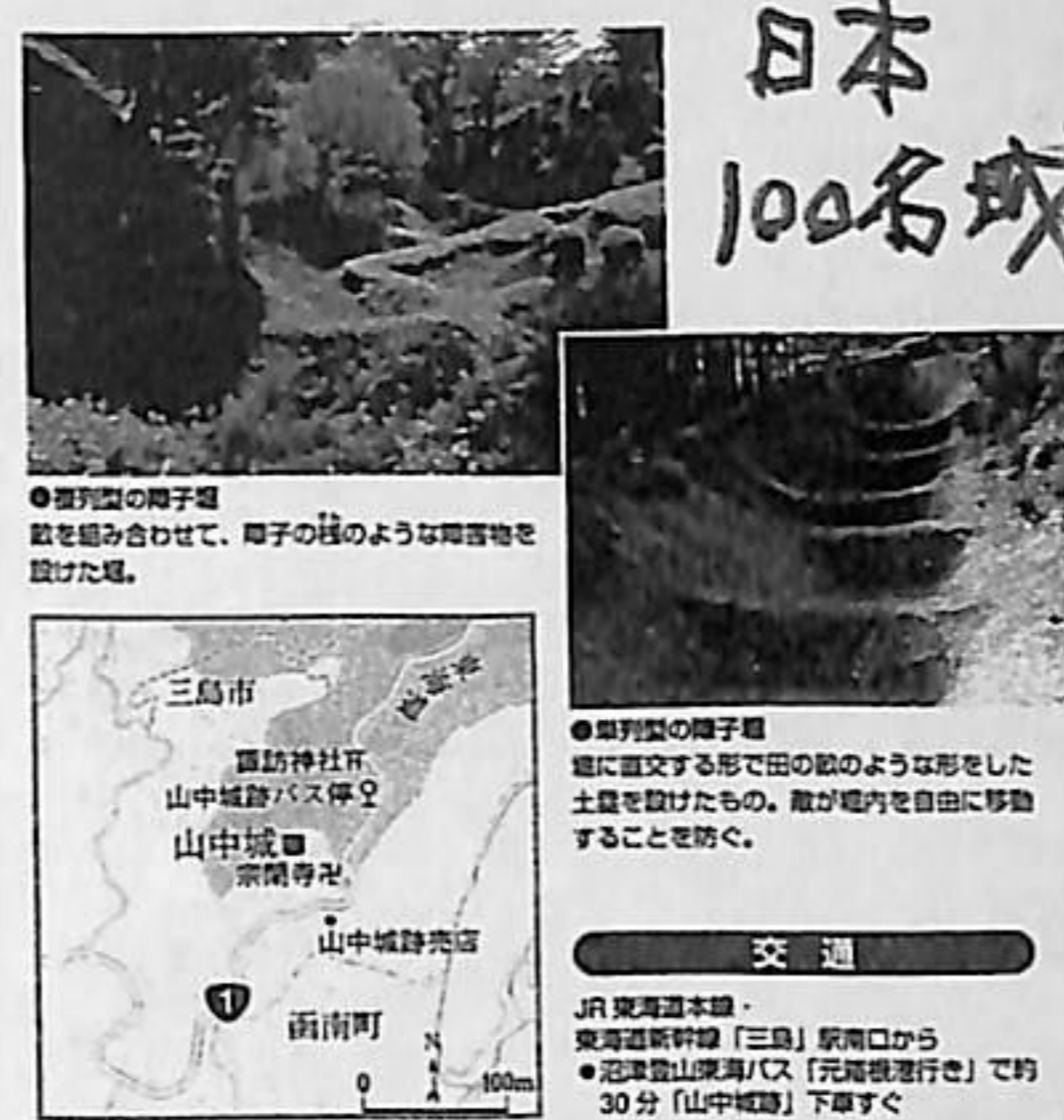
主要スケジュール

- 8時00分 新宿西口出発、東名高速道
- 11時00分～12時30分 山中城
- 車中昼食 葦山城、江川邸、葦山反射炉
- 13時00分～16時30分 堀越御所跡、蛭が小島、北条邸跡、願成就寺
(時間の都合で一部を省略することがあります)
- 19時30分 新宿着、解散



左	中	右
徳川家康 (30,000)	羽柴秀次 (17,000) 中村一氏 山内一豊 田中吉政 堀尾吉晴 柳直末	池田輝政 (2,500) 木村重石 (2,800) 長谷川秀一 (3,600)
	羽柴秀勝 (2,500)	堀秀政 (8,700) 村上義明 溝口秀勝 丹羽長重 (700)
計 30,000人	計 19,500人	計 18,300人
合計 67,800人		

山中城の攻勢



日本100名城



交通

●池田丸
三崎出丸は城内でも西に位置する。身長400m、最大幅50mあり、縦長で出さずような形をした土塁である。

●石垣は土と空堀でつくられた土の城だが、城址公園や西の丸の石垣が美しく、夏と並んで見るさまは圧巻である

●堀子堀、土塁
堀子堀は土と空堀でつくられた土の城だが、城址公園や西の丸の石垣が美しく、夏と並んで見るさまは圧巻である

●石垣は土と空堀でつくられた土の城だが、城址公園や西の丸の石垣が美しく、夏と並んで見るさまは圧巻である

葦山城主・北条氏規、ついに降伏

天正十六年に上洛、秀吉に謁見した氏規は、秀吉への臣従を主張した一人。小田原攻めでは、伊豆・葦山城に三六〇〇の兵と立て籠もり、織田信雄をはじめとする四万四〇〇〇の豊臣軍を相手に、約三ヶ月間城を守り抜いた。

六月二十四日、駿河国今川館で人質としてとらえられた氏規は、ついに降伏した。氏規は、自害する氏政を介錯すると誓い、北条氏に忠義を尽くした氏規を評価して召し抱え、彼の死後、子孫を河内国狭山で大名に取り立て北条の名を残した。

氏直が用いた「軍配印籠」(左)。東京国立博物館蔵。葦山北条氏が居住した陣屋の門。提供一西本陣跡別荘

小田原防備の要となった箱根の関門

小田原征伐経過

- 天正17年1589
- 11月24日 秀吉、北条氏へ宣戦布告
- 12月10日 秀吉、家康ら作戦会議
- 天正18年1590
- 2月1日 第1陣家康出陣
- 3月1日 第9陣秀吉出陣
- 3月29日 山中城落城
- 4月1日 小田原城完全包囲
- 6月23日 八王子城落城
- 6月24日 葦山城北条氏規降伏
- 6月26日 石垣山城完成
- 7月5日 小田原城北条氏降伏

きょうのみどころ

- 山中城＝小田原支城。みごとな堀障子で名城100選に
- 葦山城＝北条早雲居城。小田原征伐を守りぬく
- 葦山代官江川邸＝現存邸宅最古で国重文指定
- 葦山反射炉＝江川英武が築いた大砲製造炉
- 蛭が島公園＝伝頼朝幽閉地、よりそう頼朝と政子の像
- 北条邸跡＝鎌倉に本拠移すまでの北条氏館
- 伝北条政子うぶ湯の井戸＝100m離れた伝説の井戸
- 願成就院＝北条時政建立の菩提寺
- 守山八幡宮＝頼朝旗揚げ時に戦勝祈願
- 堀越御所跡＝鎌倉公方足利政知御所跡

みごとな障子堀、うね堀が連続する後北条の名城

戦国末期、関東の覇者北条氏が小田原東口防備の要として築いた箱根の要塞。永禄年間、北条氏康築城*。城は東海道の街道*沿いの山脈を巧みに利用し、大手口を街道に向け、本丸、二の丸、三の丸、岱崎出丸を構えた天険の要害である。天正17年豊臣秀吉の「小田原征伐」に備え大改修したが、翌18年3月、秀吉率いる圧倒的な大軍の前に松田康長以下4千の城兵は善戦も空しく一気に陥落した。石垣がなく土塁と空堀で作られた土の城だが、城址公園として復元整備が進み、西の丸と西櫓間、岱崎出丸などに築かれた障子堀やうね堀が続く姿は圧巻、「日本100名城」にも選ばれている。

- *「後北条箱根10城」の根城(本拠城)
- *箱根東海道は当初足柄峠を越え、のち湯坂に替わり、江戸時代始め「五街道」制定で山中城コースが整備された。当時は山中城周辺はまだ寒村で東海道の主街道ではなかった
- *松田康長邸と伝わる石柱が「芝離宮恩賜庭園」に移築現存、山中城のものかは確認できない

後北条自慢の山中城がわずか2時間で落城

山中城は秀吉軍防備の要で、箱根の天険を利用、東西およそ300m、南北およそ200mの城域に本丸以下の主郭部と出丸からなる。周囲に二重土塁を巡らせ、空堀内部を幾重にも区切る「障子堀」や「うね堀」を設け、その中に落ちた敵をめがけ鉄砲や弓矢で狙い打ちする仕組みだった。3月29日午前10時、中央を羽柴秀次軍、右側を堀秀政、池田輝政など連合軍、左側を徳川家康軍、合計7万が攻めかけ2時間で落城した。大軍をもって攻め込むという秀吉の物量作戦に2重土塁も障子堀もまったく機能しなかった。北条軍の戦死者は500人を数えた。



本日の案内コース

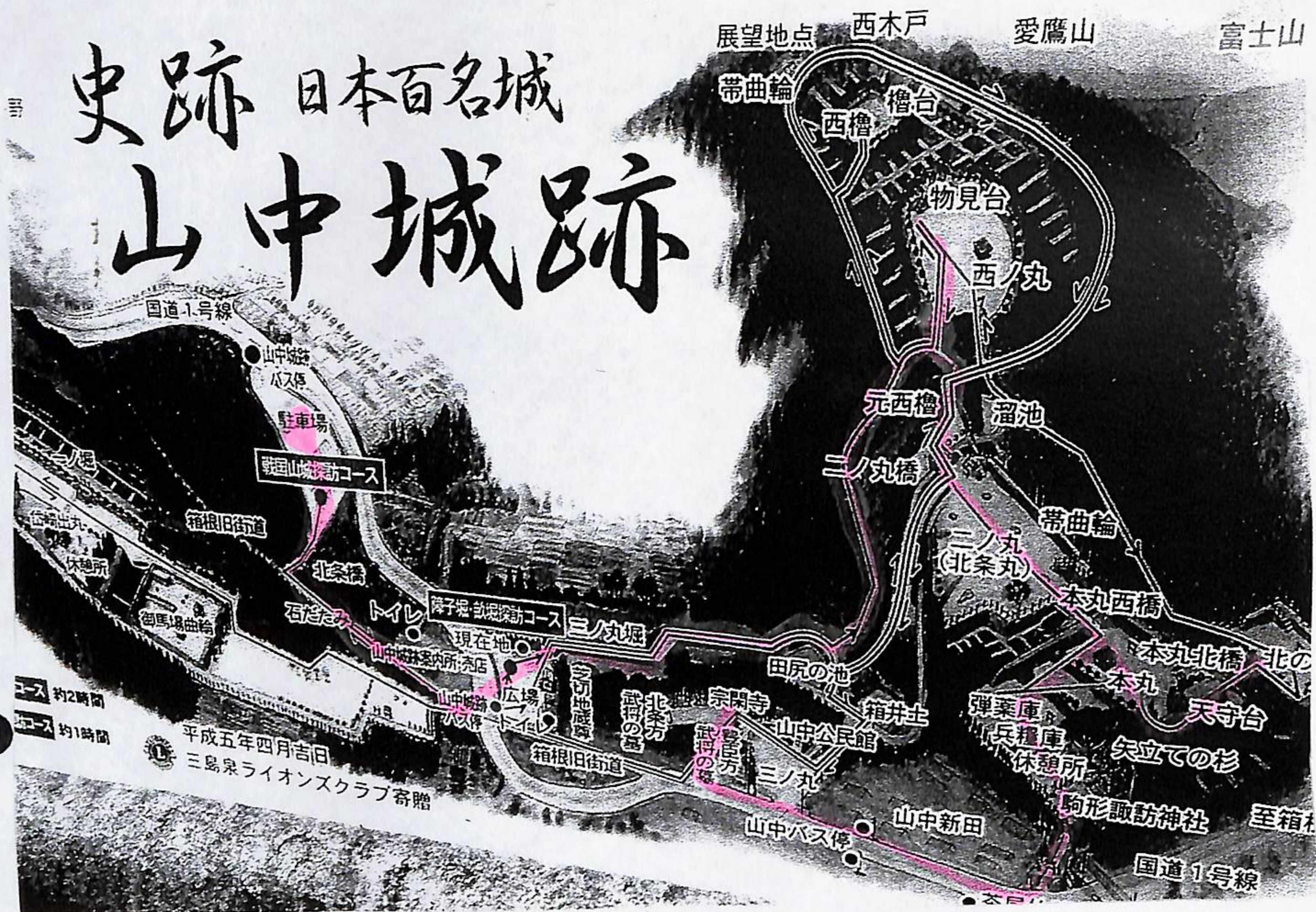


山中城 障子堀



天正18年の関東地区

史跡 日本百名城 山中城跡

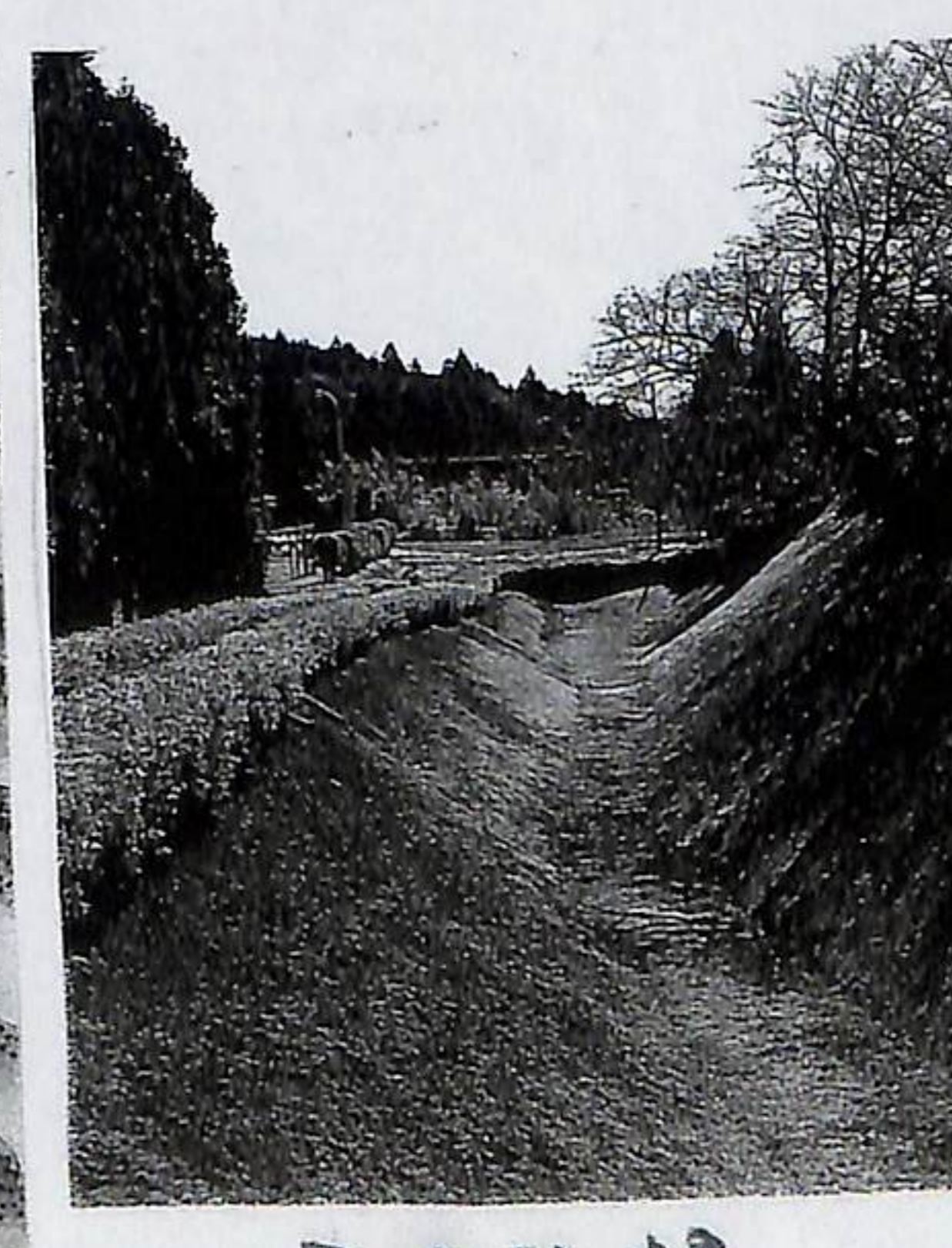


後北条流の典型、「二重土塁」と「障子堀」「角馬出し」の山中城を歩く

- ①小田原攻撃がなぜ「征伐」なのか=私戦を禁じた豊臣秀吉の「総無事令」に、北条氏政の「沼田侵攻」が違反と断定されたため
- ②北条氏の敗因=時の流れを読めず、大勢を見誤った「井の中のかわず」。
北条氏対秀吉=日本の全武将を相手に戦う羽目に

戦国最大の城塞都市小田原に籠もった井の中のかわず、北条一族

北条家は、天正一八年一月から籠城を想定した土塁、曲輪による小田原城「惣構」の構築を開始、堀の幅七メートル、城下町の周囲九キロも外郭で囲む城塞都市を築き上げた。永祿四年（一五六一）、上杉謙信（三三）率いる一〇万の軍勢を撃退した経験に基づき小田原の北条勢は籠城する。やがて、包圍軍は兵糧切れて撤退すると読んだのだが、秀吉は二〇万を超す大軍勢が、半年間行動できるだけの兵糧を用意して支城を次々と落とし、包圍網を狭めて北条方を追いつめる。関東の情勢しか知らない北条家の大きな誤算だった。



- 1) 富士を背にV字に迎え討つ巨大城郭*岱崎出丸
 - ①山中城跡駐車場で降車。
 - ②旧箱根街道=石畳が続く林道。箱根街道は慶長時代以降に整備（前出）、当時は間道か。
 - ③岱崎出丸=天正18年の秀吉軍攻撃に備えて急造された出丸。ひろびろとした曲輪は一見ゴルフ場と錯覚する。好天ならすり鉢状見張り台から富士山と裾野がひろがる。出丸は前面に二重土塁、障子堀とうね堀が続く。見どころ地点は多少離れているので今回は立ち入らない。
*岱崎出丸を攻めた中村一軍の「渡辺勘兵衛覚え書」によると中村軍は100m手前に迫って火縄銃による鉄砲を応酬、勘兵衛らはすりばち曲輪を破り、3の丸、2の丸から西の丸へ攻め入る
 - ④山中城跡公園、3の丸跡広場=元大手3の丸跡。トイレ、案内図、史蹟看板
*史蹟看板「国指定史蹟山中城跡」（城内の別の看板を記載）=
山中城は小田原に本城のあった北条氏が永祿年間に築城したと伝えられる中世最末期の山城である。小田原防備のために創築したものである。箱根山西麓の標高580mに位置する、自然の要害に囲まれた山城で北条氏にとって西方防備の拠点として極めて重要視されていたが、天正18年3月全国統一をめざす豊臣秀吉の圧倒的大軍の前に一日で落城した。三島市は山中城跡の史蹟公園化をめざし、昭和48年から発掘調査を行ない、その学術的成果にもとづく環境整備を実施した。その結果、本丸や岱崎出丸をはじめとした各曲輪の様子や架け橋、箱井戸、田尻の池の配置など、山城全容がほぼ明らかになった。とくに障子堀やうね堀の発見は水のない空堀にうねを残し、敵兵の行動を阻害するという、北条氏流築城術の特徴の一端を示すものとして注目されている。
*「渡辺勘兵衛覚え書」に「3の丸の2階門、2階門丈夫にして」=主要城門は櫓門といえる
- 2) 迂回して堀底道を進む*3の丸堀から西の丸へ
 - ①公園から宗廟寺にかけて3の丸で大手に相当、正面先端が南櫓跡。
 - ②まずは3の丸の西端を迂回して西の丸をめざす。
 - ③3の丸堀=堀は登城道的一方で攻撃道にもなる。うね堀
*史蹟看板「3の丸堀」=
3の丸の西側を出丸まで南北に走るこの堀は大切な防備のための堀である。城内の各曲輪を囲む堀は縄張りにしたがって堀割ったり、うねを掘り残したりして自然地形を加工したのに対し、3の丸堀は自然の谷を利用して中央に立てのうねを設けて二重堀としている。中央のうねを境に東側の堀は水路として箱井戸、田尻の池からの排水を処理し、西側の堀は空堀として活庸していたものである。この堀の長さは180m、最大幅30m、深さ8mを測る。
 - ③3の丸と2の丸間の谷地。田尻の池、箱井戸
 - ④2の丸と西の丸間の谷地。ほりきり、ため池

3) 北条氏の自慢、みごとな堀障子と角馬出し*西の丸

①西の丸=西方尾根の守り。障子堀がみごとな空堀を挟んで西櫓、西櫓堀、帯曲輪と続く。西櫓は角馬出しと考えられる。時間の関係で今回は俯瞰だけ。

*史蹟看板「西の丸」=

西の丸は3400㎡の広大な面積を持つ西方防備の拠点である。西端の高い見張り台はすべて盛り土を積み上げたもので、ここを中心に曲輪の三方をコの字型に土塁を築き内部は尾根の稜線を削平し、見張り台に近いところは南側に盛り土して平坦にならしている。曲輪は全体に東に傾斜して東側にある連絡用通路を排水口として雨水などが集められるしくみである。

②物見跡=西の丸の先端に一際高い物見台。西の丸から周囲の障子堀を観察。美しく複雑な空堀構造は「北条流堀障子」の変形、城郭史上まれな貴重な遺跡といえる。

*史蹟看板「西の丸見張り台」=

西の丸見張り台は下から盛り土によって構築されたものである。発掘の結果、基底部と肩部にあたる部分を堅固にするために、ロームブロックと黒色土を交互に積んで補強していることが判明した。標高は580mで本丸の矢立ての杉をはじめ諸曲輪が眼下に入り、連絡、通報上の重要な拠点であったことが推定できる。

③西の丸堀、障子堀、うね堀=堀は西方防備の拠点にふさわしい深い堀で先端は谷に連なっている。とくに西櫓側は中央に太いうねを置き交互に両曲輪に向かってうねを出しているが、北側は東西にうねを伸ばして堀をより複雑にしている。山中城最大の見所といえる。

*史蹟看板「元西櫓」=

この曲輪は西の丸と2の丸の間に位置し周囲を深い空堀で囲まれた640㎡の小曲輪である。曲輪内は堀を掘った土を1mあまりの厚さに盛り土し平に整地されている。この盛り土の下部にはロームブロック積まれていたがこれは曲輪内に溜まった雨水を排水したり霜による地下水の上昇を抑え表面を常に乾いた状態に保つための施設と考えられる。

4) 谷地を掘り切った防御拠点*2の丸(北条丸)

①2の丸虎口=主尾根と西尾根を結ぶ城内最大の防御拠点。

深い掘切り、2の丸かけ橋、両脇に土塁を積んだ櫓門。木橋は緊急時落として攻め込まれないようにした。

②2の丸=主尾根を本丸から掘り切った城内最大の曲輪で千人溜りに相当する。狭い本丸の機能を分担したことも考えられる。



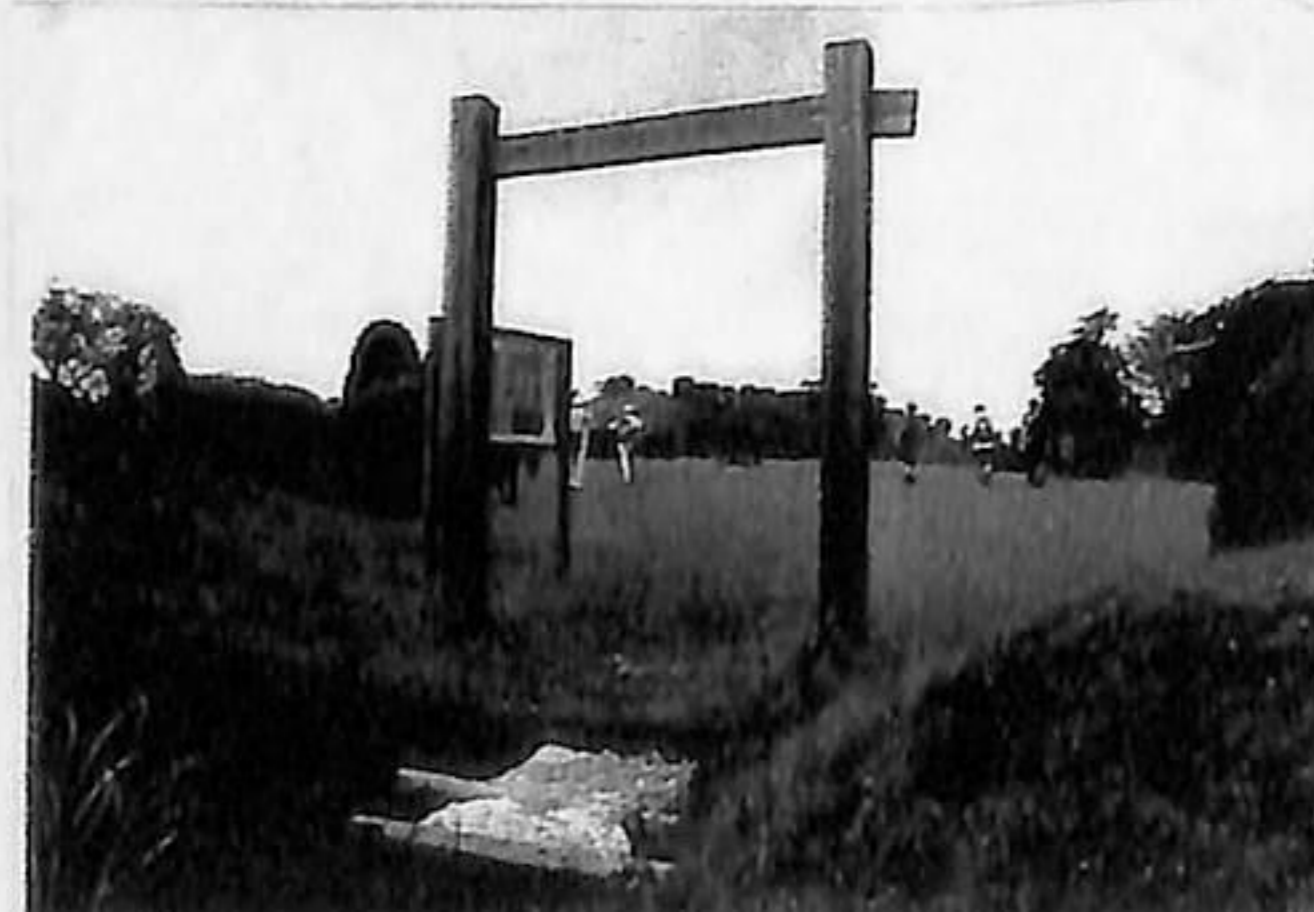
障子堀



角馬出しの面や門



うね堀



5) 城主が住んだ*本丸

①本丸虎口=主尾根を掘り切りして虎口を築く。本丸西橋は木橋で櫓門。

②本丸=山中城の中心地で天守と2の丸、兵糧庫、北の丸に接続する。城主の居住空間だが戦後の開墾と根菜類の栽培にともなう天地返して城内の建物の遺構はほぼすべて破壊されたとみられる。建物は掘り立て柱の萱ぶきまたは板ぶき、落城時は敵方に再利用されないよう自焼した。現在藤棚周辺が本丸御殿跡と考えられる。

*史蹟看板「本丸跡」=

標高578m、面積1740㎡、天守櫓とともに山中城の中心となる曲輪である。周囲は本丸にふさわしい堅固な土塁と深い堀に囲まれ、南は兵糧庫と接している。この曲輪は盛り土によって兵糧庫側から2m前後の段を作り2段の平坦面で築かれている。虎口はみなみ側にあり北は天守閣と北の丸へ、西は北条丸へ続く。

*史蹟看板「本丸堀と櫓台」=

本丸と2の丸との間の本丸西堀に[]土橋によって2分されている。北[]の堀止めの斜面にはV字状のやげん堀が掘られ[]その南側に箱堀が掘られていた。堀底や[]壁が2段になっていたため修築が行なわれ一部やげん堀が残ったようである。土橋の南側はうねによって8区画に分けられ途中屈曲して箱井戸の堀へと続いている。堀底から本丸土塁までは9mもあり、深く急峻な堀である。堀の2の丸側には幅30~60cmの犬走りが作られ、土橋もこの犬走りによって分断されていたので、当時は簡単な架橋施設で通行していたものと思われる。

6) 中世なごりの井楼櫓か*天守台

①近世天守建築は織田信長から始まるが当時はまだ広く普及されたとはいえない。前時代から引き続く井楼櫓であろうか。小田原城の拠点城であることから「伝えの城」も考えられるか。

*史蹟看板「天守櫓跡」=

標高586m、天守櫓の名にふさわしく山中城第1の高地に位置している。天守は独自の基壇の上に立てられており、この基壇を天守台という。基壇は一辺7.5mのほぼ方形となり、盛り土によって50から70cmの高さに構築され、その四周には幅の狭い帯曲輪のような通路が一段低く設けられている。天守台には井楼、高櫓が立てられていたものと推定されるが櫓の柱穴は植樹によってかく乱されていたため発掘調査では確認できなかった。本丸から櫓台への昇降路は基壇より南へのびる土塁上に2mくらいの幅で作られていたものと推定される。



2の丸



↑本丸↓



天守台



7) 北の守りだからめ手? *北の丸

①本丸北橋を渡ると北の丸となる。

*史蹟看板「架け橋」=

発掘調査の結果、本丸と北の丸を結ぶ架け橋の存在が明らかになりその成果を元に復元したのがこの木製の橋である。山中城の堀には土橋が多く構築され、現在も残っているが重要な曲輪には木製の橋もかけられていた。木製の橋は土橋とくらべて簡単に破壊できるので戦いの状況によって破壊して敵兵が堀を渡れなくすることも可能であり、曲輪の防備には有利である

*史蹟看板「北の丸跡」=

標高583m、天守櫓につぐ本城第2の高地に位置し、面積も1920㎡と立派な曲輪である。一般に曲輪の重要度は外の曲輪よりも天守櫓により近く、より高い位置、つまり天守との位置と高さに比例するといわれている。その点からも北の丸の重用さがしのばれる。三方を土塁で囲み、木橋をかけた

8) 本丸下段兵糧庫から宗閑寺へ

①再び本丸に戻り下段の兵糧庫跡へ

*史蹟看板「兵糧庫跡」=

ここは古くから兵糧庫とか弾薬庫と伝承されていた場所である。中央を走る幅50cm、深さ20cmの溝は排水溝のような施設であったと考えられ、この溝が兵糧庫を東西二つの区画にわけていた。西側の施設からは南面する3ま、4まの建物の柱穴が確認された。このことから周辺より出土した平たい石を礎石上に建物があったものと考えられる。東側の区画からはすずり、甲冑片、陶器などが出土している。

②駒方諏訪神社、宗閑寺

頼朝が幽閉されて北条政子が育った伊豆の山里=大河ドラマのふるさと

1) 頼朝が配流生活を送った*蛭ヶ小島 (担当榎本=別資料参照)

①永暦元年(1160)源頼朝は14歳でこの地に流され、治承4年以仁王の令旨を受けて平家打倒に立ち上がるまでの20年間、この地で配流生活を送った。

2) 鎌倉移住以前の北条氏の本拠*北条氏邸 (国指定史蹟)

①鎌倉幕府の執権として活躍した北条氏が鎌倉に本拠地を移すまでの館跡。ここで政子が生まれ、頼朝と出会う。また鎌倉幕府滅亡後、一族で生き残った女たちが邸地跡に円成寺を建て北条氏の冥福を祈った。円成寺は尼寺として江戸時代におよんだ。



②発掘調査で鎌倉時代はじめの建物跡や出土遺物が発見されている。調査発掘現場入り口まで。

3) 伝北条政子うぶ湯の井戸

①北条氏邸跡近くに伝わる。「保元2年時政の長女としてこの地に生まれる」とした看板がたつ

4) 頼朝祈願寺、運慶に彫らせた重要文化財3基と国史跡*願成就寺 (国指定史蹟)

①天平元年行基建立とされる古刹。

②頼朝の旗上げにあたり本尊阿弥陀如来に源氏再興を祈願。頼朝は報恩のため仏師運慶を奈良から招いて彫らせた阿弥陀如来など3基を寄進、現存し国の重要文化財に指定。

③境内に政子の父北条時政の墓、堀越公方茶々丸の墓

5) 8代時宗の子が立てた一族菩提寺*成福寺

①北条正宗が両親と歴代北条氏の菩提を弔うため建立、現在も子孫が守る。

6) 北条早雲に滅ぼされた鎌倉公方*堀越御所跡

①鎌倉公方と執権上杉家の内紛に始まる関東の戦国時代、足利8代將軍義政は関東直接支配のため兄政知を派遣するが戦乱のため鎌倉まで行き着くことができず2代36年間にわたって堀越の地にとどまる。明応2年その子茶々丸が北条早雲に攻められ滅亡。

②発掘調査によって池跡ややり水、建物跡がみつきり都風の公方の生活がしのばれる。

お断り=進行や天候により一部を省略することがあります

「城を歩く会」当面の予定=詳細は会報第45号を参照ください

①12月8日(土曜日)「港北ニュータウンに横浜市歴史博物館、環濠部落と茅ヶ崎城を訪ねる」=茅ヶ崎城は関東戦国時代、関東管領上杉氏が築城、のち後北条の小机衆となった。戦国初期の遺構がよく残り城址公園としてきれいに整備されている。安心して行ける教科書的の城。

②1月26日(土曜日)「新年のつどい」

③2月以降のスケジュールは1月発行の会報第46号に掲載します

幸せのためなら妹も騙す
政子が見つんだ吉夢



現在の蛭ヶ小島に建つ碑。小島といっても当時は川の中州であり、絶海の孤島ではなかった。北条氏の館は目と鼻の先であった。



頼朝は14歳から34歳までの間、20年も流罪人として蛭ヶ小島で過ごした。禍福はあきなる縄のごとし。この地に流されたことは、かえって頼朝にとって運命の種となった。1つには地方在住の「武士」の資質となった。

頼朝は「謀反人の息子」として死刑となるはずだった。その頼朝の命を救ったのは平清盛の義母・池澤尼である。頼朝少年の姿かたちが早くして失った自分の息子(清盛の異母弟)に似ていると、尼は清盛に対して命乞いをした。一度は断った清盛であったが、「亡き夫(清盛の父・忠盛)が生きていたら、こうもすげなくあしらうこともないのに」と泣き叫び、湯水を断って命がけで助命嘆願をする義母を断れない。清盛は涙を折れ、この少年を伊豆蛭ヶ小島(現・静岡県伊豆市)の山に送り、へ流すことにした。



神奈川県鎌倉市蓮花山に建つ源頼朝銅像。北条時政は平家滅亡を見越してか、鹿ヶ谷の陰謀(宋遣に終わった反平氏のクーデター)の翌年、1178年(治承2年)、頼朝という源氏の貴種に娘を嫁がせた。

→堀越御所跡



円成花院



北条氏邸跡



流されてラ... 頼朝を育てた蛭ヶ小島